

中國人の思考形態に關する一考察

——類書を一例に——

松 尾 幸 忠

はじめに

中國人の思考形態の特色を表す場合、しばしば擧げられるのが「現實的である」もしくは「即物的である」などという言葉である。實際、様々な中國人と接してみると、そのような傾向が強く読み取れる。このような思考形態は中國古代文明の發祥とともに、今日まで長きにわたり受け継がれてきたものと考えられよう。またこの様な特色についてはあらゆる局面で該當する事象があるため、様々な書物の中でこれまでも論じられてきた。本稿では、その中から特に要を得た説明がなされていると思われる書物を取り上げ、併せて具體例と共に、このような中國人の傳統的な思考形態について檢證し、中國文化理解への手掛かりの一つとしてみたいと思う。

まず次に掲げる文章を眺めてみたい。中國哲學の碩學による中國人の思考形態の特色についての發言である。(原文は新字體)

中國人の思考は、漢字ならびに漢字を使った文章によってなされる。とりわけ漢字が重要である。この漢字は本質的には表意文字である。その表意とは、物の寫しのことである。物の寫しであるから、まず先に物があり、それに似せた繪畫的表現として漢字の字形が生れる。とすると、なによりもさきに、物體(自然的存在)があるということになり、物の世界が優先する。「はじめにことば(神)ありき」ではなくて、「はじめに物ありき」なのである。だから、形而上的世界よ

りも形而下の世界に中國人の關心が向かうようになる。こういう構造から、中國人はものごとくに即して、事實を追って考へるといふ現實的發想になつたのである。現實とは何か。それは物に圍まれた具體的な感覺の世界である。このため、感覺の世界こそ中國人にとって最も關心のある世界とならざるをえなかつたのである。

中國人が現實的であり、即物的である、ということの根本的理由はここにある。(加地伸行『儒教とは何か』中公新書、一九九〇年、一四〇―一五頁)

「はじめに物ありき」ということが中國人特有の認識方法であると認められるのは、その周圍にある物をそのまま繪畫的に文字にしてしまつたという點である。即ち、言語においても即物的・現實的に認識し、思考する道を選んだのである。特に中國文明は、世界の古代文明の中で唯一、文字表記・言語形態が今日までそのまま繼續してきた、極めて稀な文明である。數千年にわたるこのような思考形態を基盤に、中國人は目の前で發生する様々な事象に對して強い興味と關心を抱くことになり、結果、膨大な史書が生み出されることになつたのであろう。歴史とは、まさに現實の、個々の事象の積み重ねに他ならないからである。

次に佛敎學の碩學による、主に言語面から見た中國人の思考形態についての發言を見たい。(原文は新字體)

われわれは、シナ人における判斷及び推理の表現方法を検討してみると、シナ人の思惟方法としては、普遍者よりもむしろ個別者あるいは特殊者を重視し、また抽象的なものよりも具象的なものに注視する傾向のある事實を認めることができる。

シナ語彙彙に關してグラネー(マルセル・グラネ。フランスの中國學者。一八八四―一九四〇。筆者注)の行なつた研究の結果は、……『原始的なもろもろの言語は動詞の形が極度に豊富であるという點に特徴があるのに、この點についてシナ語は奇妙にも貧弱であり、ほとんど變化しない單音節語を用い、きちんと分化した品詞の區別を見いださないのである。しかしながら、他のもろもろの言語においては形の多種多様性によって示される具體的表現の味わいは、シナ語においては、それを示す語の著しく豊富なことから證せられるように、無比の力をもって、事物の特殊な様相を伝えることが知られる。』(『シナ人の思惟方法』中村元選集〔決定版〕第2卷、春秋社、一九八八年、一九二―二〇頁)

シナ人の思惟が具體者に向けられているということは、文

字の構成方法にも認められる。いうまでもなく、シナの文字はもともと象形文字である。……シナでは古くからあらゆる漢字の構成法に、象形・指事・會意・形聲の四種を認め、また轉用に關しては轉註と假借との行なわれることを認めているが、しかしもともと象形文字がその基本となっていることに變わりはない。アルファベット文字のようなものを、シナ人は全然思いつかなかった。シナ人は意味を表す文字に慣れてしまつて、この表意主義を全然放棄しようとはしなかったのである。(同、二二頁)

シナ人は知覺にもとづく表象(特に視覺的表象)を重視し、個別的な事例にのみ注意していたために、個別のあるいは特殊な事例を包括する普遍者を把握しようとしなかった。したがつて多數の特殊者をひとつの普遍者のもとに包括するという思惟活動がさほど發展しなかつた。

……シナ語には、英語の *old* に相當する抽象概念を表示する語は、原則として存在しない。六十を耆、七十を老、八十九十を耄、といい、抽象概念としての「年をとつてゐる」にあたるものがない。また「死」は、英語ではいかなる場合でも、名詞では *death*、動詞では *die* であるが、シナ語では、天子の場合には崩、諸侯の場合には薨、大夫の場合には卒、士の場合には不祿、庶人の場合には死といい、それぞれ死者

中國人の思考形態に關する一考察(松尾)

の階級身分に應じて用語を異にしている。(同、四三―四四頁)

もちろんシナの哲學者のあいだにおいて、普遍と特殊との關係が、少しも自覺されなかつたというのではない。荀子のごときは、この關係について明確な觀念をいだいていた。彼は名に「共名」と「別名」とを區別した。……

しかしながら、普遍と特殊とに關するシナの論理思想は、これだけにとどまつていて、その後發展しなかつた。荀子は、たしかに普遍と特殊との區別を自覺していたけれども、彼はアリストテレスのように「定義」なるものの自覺に到達しなかつた。荀子に定義の自覺がなかつたということは、シナ語において類と種差とに關する自覺が、つねに明確なかつたで現れているのではないという事實に對應するものである。

(同、四六頁)

……類を種差によつて限定して表現する意味を明確化しようとするギリシア的の思惟方法は、けつきよくシナ人にとつては縁遠いものであつた。こういう特徴が、シナの辭書の内容にも見いだされる。シナの辭書は定義を述べているのではなくて、いくつもの同義語を述べることによつて、それらの諸語に共通な意味内容を知らせようとするのである。(同、四七頁)

引用第二段にある「アルファベット文字のようなものを、シナ人は全然思いつかなかつた」という一節は、明代にマテオ・リッチを始めとする宣教師たちが漢字のアルファベット化を行なったとき、當時の中國人たちにはほとんど影響を與えなかつたこと、また、清末から近代にかけての國語改革運動で（カナ方式にするのか、ローマ字方式にするのかを始めとして）音標文字化に當つて、政治・教育の兩面において實に多大な努力が費やされたことなどを想起すると、實に納得のいく指摘である。特に清末、それが布教という最終的な目的のためであることを勘案しなければならぬにせよ、宣教師たちによる熱心なローマ字化に對し、それに對する中國側の反應は極めて鈍いものであつたと言えよう。

漢字は、一字一字が個別の事象を表しており、しかも文字＝單語（即ち、表意文字というよりは表語文字）という性格から、すべての文字を、共通する幾つかの音標符號で表記しようという考えには至らなかつたのであろう。このことは、引用第一段にある「シナ人の思维方法としては、普通者よりもむしろ個別者あるいは特殊者を重視し、また抽象的なものよりも具象的なものに注視する傾向のある事實を認めることができる」という指摘、及び引用第四段にある「定義なるもの、自覺に到達しなかつた」という指摘と通ずるものがあるのであろう。

特に引用第五段にある「シナの辭書は定義を述べているので

はなく、いくつも同義語を述べることによって、それらの諸語に共通な意味内容を知らせようとするのである」という指摘は、中國の所謂「百科全書」といわれる類書にまさにその實例を見ることが出來、また他ならぬ古典詩文への傳統的な注釋のあり方が、原則として直接的に語義の解釋を行なわず、先行用例を以てその注としていることも同様の考え方の延長線上にあるものと見なすことが出來よう。そこで、今回はその一例である類書を取り上げて、これまで考察してきた點について検討してみたい。

二

類書については、從來様々な專著が著され、その分類概念や個々の書物についての研究がなされてきた。類書と一口に言つても制度的な事項に重點を置いたものから、文學に重點を置いたもの、またその兩者を兼ね備えたものなど實に様々な種類が存在する。そのいずれであつても、共通する概念としては、四部にまたがる著作から類に従つて文例を抽出した、「百科全書」と「史料彙編」との性質を兼ね備えた書籍、と規定しておいて大きな誤りはないであらう。むしろ「史料彙編」としての性質が基本にあつて、結果、「百科全書」的な性格を帯びるようになったということもできよう。この、中國における「百科全書」である類書を、西洋で初めての百科事典といわれるブリニ

ウスの『博物誌』（七七年）と比較すると極めて興味深い事實が判明する。（引用は『プリニウスの博物誌』I、II、III、中野定雄他譯、雄山閣、一九八六年による）ここでは類書の代表格とも言える『藝文類聚』と『博物誌』について、共通する要素を持つ幾つかの項目について比較をしてみたい。まずは自然現象の一つである雪、次に固有名詞としての山及び川である。

雪 毛詩曰、北風其涼、雨雪其霏。又曰、今我來斯、雨雪霏霏。又曰、上天同雲、雨雪雰雰。……左氏傳曰、楚子

次于乾谿、雨雪、王皮冠、秦復陶、……。山海經曰、由首之山、小威之山、空桑之山、竝冬夏有雪。（卷一「天部」下）

廬山 山海經曰、廬山名有二。一曰天子都。二曰天子鄩。伏滔遊廬山序曰、廬山者江陽之名嶽、其大形也、背岷流、面彭蠡、蟠根所據、巨數百里、……。〈卷七「山部」上〉

河水 山海經曰、崑崙山、河水出焉。又曰、陽紆之山、河出其中、陵門之山、河出其中。毛詩曰、新臺、刺衛宣公也。納彼之妻、作新臺于河上而要之。國人惡之、而作是詩也。新臺有泚、河水瀟瀟。……。〈卷八「水部」上〉

霰・雪・霜・露の性質 ……霰は凍った雨からでき、雪は同じく雨からだあまり固く凝縮せずにできたもの、しかし白い霜は冷い露からできたものだとしたこと。雪は冬期

中国人の思考形態に關する一考察（松尾）

に降るが霰はそうでない。そして霰そのものは夜間よりも日中によく降り、雪よりずっと早く溶けるといふこと。霧は夏期やごく寒い天候時には生じないし、露は霜の降る、あるいは非常に暑い、あるいは風のある天候にはおかないで、晴れた夜にだけおくといふこと。……。〈第二卷 六一〉

ナイル河 ナイル河の流路 ナイル河が發する水源地はまだ確かめられていない。それは事實焼けつくような砂漠をおそろしく長いこと進むのであるが、すべての他の國々が戦争によって發見されたのと違って、非武裝の探検家たちによって踏査されたのである。ユバ王が確かめたかぎりでは、この河はその水源を大洋に近い下マウレタニアのある山にもち、やがてニリデスと呼ばれる激んだ湖を形成している。……。〈第五卷 一〇〉

リバヌス山脈 シドンの背後からリバヌス山脈が始まるが、これは一九〇マイルほどの距離にあるコイレ・シリアと呼ばれる地區のジミユラまで延びている連山である。この山脈に向い合って、間に谷を挟んで、同じくらの長さのアンチリバヌス山脈（カウンター・レバノン連山）が延びており、これは以前城壁でリバヌスと結びつけられていた。……。〈第五卷 一七〉

『博物誌』の方は、現在から見てその科學的正確さはともかく、物質なら物質で、その組成から説明しようとする態度、山や川については、その地理的な位置や流域について説明する態度に今日の百科事典の萌芽を見出せるのに對し、『藝文類聚』の方は全く史料彙編的な性格しか見出すことが出来ない。さらには、いくつかの史料を引用した上で、それらを批判的に比較檢證するという態度も見出すことは出来ない。これは、『藝文類聚』のみならず、同時代の他の類書、例えば『初學記』、『白孔六帖』等も同様であり、宋代における『太平御覽』また然りである。

勿論、項目によっては、組成から説明するのにやや近いものもあるが、それは引用した書物の性質によるものであって、決して歐陽詢が自ら、もしくは他人の力を借りて説明しようとしたものではない。(例：『煙』 説文曰、煙、火氣也。煩熾然也。卷八十一「火部」)

ここで興味深いのは、類書があくまでも史料彙編的性格を第一義としていたのであれば、何か別の形で、百科事典的なものが編纂されても全く不思議ではなかったはずである。しかし、あれほど多様な書物が編纂された國で、純粹な形での百科事典は編纂されなかったのである。このことは、これまでに見てきた、中國人の思考形態についての特色を裏付けるものと言つて良からう。

結

本稿では類書を一例として、中國人の個別性・具體性を重んじるという思考形態の特色について一瞥してみたが、これはあくまでも「特色」であって、「優劣」ではない。例えば、先に若干觸れた古典詩文の傳統的な注釋のあり方などは、直接意味を提示してしまふより、解釋に幅を持たせ、表現の奧行きを讀者に提供するという効果があったと思われ、その結果、解釋史の様な研究分野も開拓されたと言えるのではないだろうか。このような特色は、他の様々な文化面についても見出すことが出来ると思われる。今後もこの様な視點を手掛かりに、中國文化の特色について注意を拂っていきたい。

【注】

- (1) 倉石武四郎『漢字の運命』(岩波新書、一九七五年)「音標文字の創作」3、大原信一『近代中國のことばと文字』(一九九四年、東方書店)第2部、平野聰『反日』中國の文明史(ちくま新書、二〇一四年)第三章等参照。
- (2) 盧贛章や王照を始めとする中國人自身による音標文字化の試みがあったものの、それに對する當時の清朝政府の態度は實に冷淡であったことからこのことは證明できよう。詳しくは注(1)参照。

(3) これまでの類書研究、及びその概念等については、大淵
貴之『唐代敦煌類書初探』（研文出版、二〇一四年）「序論」
に詳しい考察がなされているので、ここでは敢えて逐一取
り上げるとは省略する。